

平成元年度文化庁芸術祭協賛公演
Nihon Ongaku Shudan (Pro Musica Nipponia)

日本音楽集団

創立25周年記念



第110回◆総合定期演奏会

有楽町朝日ホール5周年記念

1989年11月2日(木) 午後6時半開演

有楽町朝日ホール

主催＝日本音楽集団・現代邦楽協議会・朝日新聞社

第1部 創成期・60年代の作品から

箏四重奏曲 (1968年) 長沢勝俊 作曲

- [箏 I] 花房はるえ
- [箏 II] 佐藤由香里
- [箏 III] 熊沢栄利子
- [十七絃] 宮越 圭子

高音を受け持つ箏三つと、低音を弾く十七絃との四パートでできた箏群のクワルテット。四つの箏がバランスよく互いに浮き彫りにされており、二つの楽章が対照的に静と動で表現するように書かれています。(NHK委嘱作品)

ソネット I (1962年) 三木稔 作曲

- [尺八 I] 米澤 浩
- [尺八 II] 坂田 誠山
- [尺八 III] 素川 欣也

ソネットとは、14行詩、小詩のことです。ここでは、三本の尺八のための小さな歌、というほどの意味で用いられております。作曲者がデモニーシユな「本曲」にまだ接することのなかった時期の、日本の楽器のための最初の作品です。ナイーブで美しい旋律がちりばめられており、それぞれの旋律は奏者によって自由に装飾されてゆきます。

曲(くせ) (1969年) 三木稔 作曲

- [細 棹] 野口美恵子
- [太 棹] 坂井 敏子
- [筑前琵琶] 田原 順子

〈曲〉は、「四群のための形象」の中の第三群。「四群のための形象」は、日本の楽器を四群に分類し、それぞれの音色や機能に伝統的な背景を加味しつつ、曲の相互間の変化を楽しませるよう作られた作品です。〈曲〉は、そのタイトルが曲物(くせもの)とか曲舞(くせまい)に通じるスケルツォ。三つの楽器の個性から、ここでは飄逸さが形象化されています。(NHK委嘱作品)

子供のための組曲 (1964年) 長沢勝俊 作曲

- [尺八 I] 坂田 誠山・水谷 雅康
- [尺八 II] 藤崎 重康・水川 寿也
- [尺八 III] 米澤 浩・素川 欣也
- [三味線] 太田 幸子・工藤 哲子
- [琵琶] 山田まゆ美・坂田 美子
- [箏 I] 花房はるえ・佐藤由香里
- 島崎 春美
- [箏 II] 熊沢栄利子・高橋はるな
- 山田 明美
- [十七絃] 宮越 圭子・安武由香理
- [打楽器] 尾崎 太一・望月太喜之丞
- [指揮] 田村 拓男

全部で五章からなる自由な組曲。日本楽器を媒体として、生き生きと描きだされた子供の世界であり、素朴な旋律と律動感あふれるリズムを持ち、新鮮な感動と夢を与える作品です。

1. 軽やかにのびのびと
2. ゆったりとうたう感じで
3. 遊戯唄風におどけて
4. しずかに子守唄風
5. 激しく律動的に

第2部 創立25周年記念委嘱作品

座興七重(ざきょうしちえ)(初演)

和田薫 作曲

[笛] 竹井 誠
[尺 八] 坂田 誠山
[三味線] 野口美恵子
[琵琶] 坂田 美子
[二十絃] 内藤 洋子
[十七絃] 大島菜穂子
[打楽器] 黒坂 昇

この作品は、日本音楽集団創立25周年記念の委嘱ということで、笛・尺八・琵琶・三味線・二十絃箏・十七絃・打楽器のために書かれました。

昨年演奏されました「楽市七座」では、各自にそれぞれの“見せ場”を提供しましたが、今回はその名からも察せられるよう“遊び”というものを芸の中の粋として取り入れてみました。本来、大衆・民衆のものであった笛や三味線等の個々に確立した音楽を七種混合させるということは、大きな冒険でもあります。あえてその場をここで作り、この新しい“遊びの場”で各演奏者の粋な芸を伺うことができれば作曲者として無上の喜びであります。(和田 薫)

秋の舞II(初演)

松下功 作曲

[尺 八] 三橋 貴風・藤崎 重康
水谷 雅康・水川 寿也
[胡 弓] 畦地 慶司
[細 棹] 太田 幸子
[太 棹] 田中悠美子
[琵琶] 田原 順子
[箏 I] 吉村 七重
[箏 II] 木村 玲子
[十七絃] 内藤 洋子
[打楽器] 高橋 明邦・黒坂 昇
[指 揮] 田村 拓男

「日本音楽集団」の興味ある活動には日頃から注目をしていたが、今年で25周年を迎えると聞き、メンバーの方々の今までのご努力にあらためて敬意を表する次第です。その「日本音楽集団」から25周年記念の第110定期演奏会のための作曲の依頼を受け、大変光栄なことと思う反面、これまでの私には少々なじみの少ない楽器もあり、戸惑うことも多かった。

この「秋の舞II」では、それぞれ独自の発展を遂げ現在の形態や音楽を形成してきたこれらの日本の楽器が、それぞれの奏法や、表現形態をあくまで固持しながらも、秋悠の情を共通理念とする一つの空間に融合しようと考えた。

舞台上に半円を描くように位置する2面の箏と1面の十七絃と2人の打楽器奏者「天」、客席内の4ヵ所、または舞台上でそれぞれが自由な方向を向いて演奏する胡弓、三絃、太棹、琵琶の4名「地」、客席内または舞台上を移動しながら演奏する4人の尺八奏者「人」の三つのグループが、それぞれ自由な速度で、あるいは自由な表現をしながら対峙、融合を繰り返す。

なお、「秋の舞I」は胡弓独奏のための作品で、先日の10月26日に本日の演奏者の一人でもある畦地慶司さんのリサイタルにおいて初演された。(松下 功)

第3部 韓国公演の成果・日韓民族楽器群の響き

白(へく)(1988年・改訂初演) 朴範薫 作曲

- [指揮] 田村 拓男
 <韓国中央國樂管絃樂團>
 <日本音楽集団>
 [笛] 藤崎 重康
 [尺八I] 三橋 貴風
 [尺八II] 竹井 誠
 [尺八III] 素川 欣也
 [尺八III] 米澤 浩
 [胡弓] 畦地 慶司
 [細棹] 野口美恵子
 [太棹] 田中悠美子
 [琵琶] 田原 順子・坂田 美子
 [十三絃] 花房はるえ・熊沢栄利子
 [二十絃] 木村 玲子・佐藤由香里
 [十七絃] 内藤 洋子・島崎 春美
 [打楽器] 堅田 啓輝・黒坂 昇

この曲は、本條秀太郎氏の委嘱により同氏の第16回リサイタル(1988年)で初演された同名の曲をもとに、日韓民族オーケストラのために改訂して書かれたものです。

韓国と日本は永く交流が栄えました。今ふたたび音楽を通して語り合い、平和を実現したいという思いがこめられています。

第一楽章：静——静かな朝の国。その中で白い色を好んで生きてきた我が民族

第二楽章：風——さまたげなくふき当る外勢の風の中に巻きこまれた我が民族。その中で身もたえしなから生きてきた民族の苦痛と恨……

第三楽章：和——出合い、共に生きていくほかない世の中。あらゆる障壁もこえて……

まず我が民族と会った近い友、遠くにいる友、皆に出会い、ひとかたまりになって……

SOUL(1989年・日本初演) 三木稔 作曲

- [指揮] 田村 拓男
 <韓国中央國樂管絃樂團>
 <日本音楽集団>
 [笛] 藤崎 重康・竹井 誠
 [尺八I] 三橋 貴風
 [尺八II] 素川 欣也
 [尺八III] 米澤 浩
 [胡弓] 畦地 慶司
 [細棹] 野口美恵子
 [太棹] 田中悠美子
 [琵琶] 田原 順子・坂田 美子
 [十三絃] 花房はるえ・熊沢栄利子
 [二十絃] 木村 玲子・佐藤由香里
 [十七絃] 内藤 洋子・島崎 春美
 [打楽器] 堅田 啓輝・黒坂 昇

アジアの民族楽器が共同作業の場を持つことは私の長年の夢であり、その作業体である「ASIAN ETHNIC ORCHESTRA」を組織し、そのための曲を作ることは私のライフ・ワークのひとつである。

その一部として各民族楽器間の交流も必要であり、すでに1983年の日本音楽集団と中国中央民族楽団の共演の際<彩虹序曲>によって第一歩を印している。今回、韓国中央國樂管絃樂團との共演の機会を得て「SOUL」で二歩目が刻めたことは、大きな喜びである。

日本とKOREAとの間には長い長い歴史があり、日本人にはKOREAの血を引く者も多いはずだ。ただ、その歴史の中には、日本人として極めて残念な先人たちの悔むべき行為も多く含まれている。私は、日韓の共同作業にあたって、どうしてもその贖罪から始めねばならぬと思った。

また、今回の試みは、直ちに日・韓・中の三国共演につづける企画であったが、6月のあの悲しむべき事件によって先に延びることになった。私は当時北京に滞在し、中国楽器国際コンクールの審査に当たっていたが、その演奏の高い技術への感動と事件の悲惨さの間に絶句する想いであった。

「SOUL」は日韓共通の友人であるべき中国での悲劇への鎮魂の想いで書き始めたが、この曲が初演された地、SEOUL(ソウル)から発想した命名でもある。

全体は、第一楽章「TAMASHIZUME(鎮魂)」と、第二楽章「TAMAFURI(振魂)」に分かれる。前者は極めてゆるやかな速度を基本とし、さまよう魂の状況とその平安への祈りを歌う。後者は全ての打楽器が終止厳格で急速な拍を刻む中で、叫びつづける楽器たちの魂の振動である。このリズム型は、私の<巨火(ほと)>や<マリンバ・スピリチュアル>と同様に「秩父屋台囃子」を採用しており、日本の各楽器は<巨火>第三部と共通する。

(三木 稔)

■ 韓国中央國樂管絃樂團

韓国中央國樂管絃樂團は、韓国の国楽（日本でいう邦楽）に現代化をもたらそうという理念のもとに5年前に結成されました。

団員は40名で、そのほとんどが1960年代生れの若い楽士たちですが、現在最高の韓民族楽団のひとつとして評価されています。

常任指揮者である朴範薫（パク＝ボン・フン）氏は、ソウル中央大学音楽大学の教授であり大韓民国国民勲章叙勲の荣誉をもち、ソウル・オリンピックの音楽監督（開会式テーマ曲の作曲と指揮）をつとめました。

■ 松 下 功

東京芸大大学院卒。1979年西ドイツ政府給費留学生として西ベルリンへ渡り、以来東京、西ベルリンを中心に作曲、指揮、企画等に活躍。毎日コンクール入賞、西ドイツ・メンヒェングラードバッハ市国際作曲コンクール第1位。入野賞受賞。ISCM World Music Days グラーツ大会・香港大会、「ベルリン・ホリゾンテ・フェスティバル'85」等多くの音楽祭に参加。1988年2月UC バークレー大学で講演。アンサンブル東風（こち）ベルリン主宰。現在、東京芸大非常勤講師。

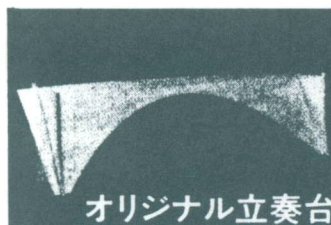
■ 和 田 薫

東京音楽大学卒。在学中、学芸コンクール1位、交響楽振興財団作曲賞入選等目ざましい活躍の後、1985年卒業の同年に東京フィルハーモニックオーケストラにより〈オーケストラのためのメタルフィック・ムーブメント〉が初演される。1986年よりアムステルダムを中心に欧米活動を始め。オーケストラのための作品群が世界各地で初演、再演され、好評を博している。〈フルート、ハープ、打楽器のための相掛〉で国際現代作曲家コンクール入選。

箏

二十絃箏

箏を愛するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏



オリジナル立奏台

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL (792)8481

祝

創立二十五周年



アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25
オリオンシャトー1F
PHONE. 03-397-2292

日本音楽集団

東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302 〒151
TEL.03(378)4741(代) FAX.03(376)2033